

# 平安絵巻にみる庶民の文様と染色技法

松 山 弘 範

Patterns and Dyeing Skills of the Populace  
in the Picture Scrolls of the Heian Period

by

Kohan Matsuyama

## 1. はじめに

日本古代の美術品や服飾品、或はその文様等をみると、古墳時代の壁画及び出土品、法隆寺、正倉院の美術工芸品、又平安時代宮廷儀式や寺社祭事に用いられた宝物等、国家的エネルギーを投入してその基範を朝鮮から隋、唐と外国文化に激しく追従する時代を経て、やがて平安中期、美術や服飾や文様、そしてそれらを造りだす技術においても国風文化を創造するに至った経緯がよく理解できる。しかしこれらの造形物は単的にいえばその時代の支配者のために造られたといっても過言ではない、それでは支配者や一部貴族のために造寺造仏に過重な労働奉仕をしたといわれる一般庶民の生活文化の程度はどうであっただろうか、その中で最も生活に身近な当時の衣服、文様、染色技法等について考察してみたい。幸いにして12世紀後半には源氏物語絵巻を始め寝覚物語絵巻、伴大納言絵詞、吉備大臣入唐絵巻、信貴山縁起、粉河寺縁起、鳥獣人物戯画、餓鬼草紙、地獄草紙、病草紙、年中行事絵巻、阿字義、彦火々出見尊絵巻等の絵巻物が現存している。

絵巻物には源氏物語のように庶民が登上しないもの、鳥獣人物戯画のように動物のみで物語を構成するものもある、しかし絵巻物は宗教的伝説や霊験記等が多い関係からも庶民が登上する機会が多い。従って本稿では12世紀に成立した絵巻物の中から病草紙、信貴山縁起、粉河寺縁起、伴大納言絵詞の四絵巻を選び、これらの絵巻に現われる庶民の文様及染色技法について考察する。

## 2. 各絵巻の概要

**A. 病草紙** 12世紀後半成立、国宝。詞書は寂蓮、絵は春日光長。餓鬼草紙、地獄草紙と同じ頃完成。これら一連の作品は仏教の生老病死における現世苦、死をもたらす病について描いたもので、この時代の難病、奇病を集めたもの、しかし深刻さはなくむしろユーモラスに描かれているものもある。かつては一巻ものであったが現在は17図に切りはなされている。

**B. 信貴山縁起** 1160～1170年の間に成立。「源氏物語絵巻」と同じ頃完成、共に絵巻としての芸術性や歴史的資料としても最高の価値をもつ。源氏物語とは内容や表現方法が異なり、宮廷と民衆、静と動、正に対象的。物語は「宇治捨遣物語、信濃国聖の事」や「古本説話集」の物語


を絵画化したもので、一卷は「山崎長者の巻」（飛倉の巻）。二巻「延喜加治の巻」。三巻「尼公の巻」から成り、信貴山の庵に住み毘沙門天につかえ、その靈験を発揮する修業僧、命蓮を中心に展開する。国宝。

**C. 粉河寺縁起** 1170～1180年の間に成立。「粉河寺大卒都婆建立縁起」（天喜2年、1054年）を絵画化した長編一卷。物語の内容は大伴孔子古一家及び関係者の信仰と靈験、千手観音の御利益に感動する人々をいきいき表現する。紀伊国那賀郡を舞台とし前編は猟師の願により庵と千手観音像出現の感動と期待の物語。後編は重病に臥す河内国長者の娘の全快により、長者一家粉河に旅立ち仏門に帰依する様子を悲劇的に描く、火災により波立つ断簡はおいしいが全体に平靜、素朴で美しい彩色が高く評価される。国宝。

**D. 伴大納言絵詞** 1170年前後に成立、上中下巻からなり詞書は「宇治捨遣物語」により絵は常磐光長といわれる。物語は都を恐怖のどん底におとし入れた応天門炎上を中心に宮中へ駆けつける宮廷人や検非違使、逃げまどう民衆の混雑を的確に又生々しく描写。

又宮廷内の伴善男、源信の陰謀事件に関連し、舎人と出納の子との争い、これを取巻く民衆のダイナミックな構成は数多い絵巻中最高と評価される。後半は源善男流罪による邸内の悲劇的感情と捕縄人の武装いでたちを正確巧みに描く。国宝。

### 3. 各絵巻に現われる文様と技法

(=文様が現われる順序)

**A. 病草子** 絵巻内容の性格上、登上する人物は四絵巻中最も少ない。

[1]小星文(連続)＝関戸家本1、「白子」白子に対する人々の笑潮を描く、黄地に墨で小星を一面に描き藍の道行の裾を腰で端折っている。 [2]斑濃目結文＝関戸家本2、「鼻黒親子」この絵は鼻黒一家4人が寛いでいる所、手前寝そべる長女の小袖に目結の後その部分を藍に染めたもの。

[3]棕栢文(暖簾)「二形」＝暖簾の文様ではあるが衣服にも好んで用いられたと思われる、この棕栢文のように大胆、躍動的に植物が描かれるのはめずらしい。 [4]楓文＝関戸家本6、「にせ医者の手で失明する男」患者、医師、手伝いの女を取巻いてこわごわ手術を覗きみる5人、その中心の主人は狩衣着用、地色は落着いた茶嵐、楓はその濃い色の線と面で描いている品格ある色。 [5]梶ノ葉文＝関戸家本8「齒槽膿漏を病む男」着用衣服は括長袴、水干はうす黄茶に抑揚ある描方による梶ノ葉を全面に配し、葉は暈かしにより変化させ立体感をもたせている。 [6]幸菱文＝関戸家本12「口臭のひどい女」衣服は白小袖に紅梅襲ね、下に幸菱文の衣を着ている、この女は宮廷勤めで、いわゆる庶民ではないがこの文様は鎌倉時代には庶民の間にも多く用いられるようになる。 [7]桜花文(几帳)＝「鍼医」患者、僧侶の向こう側に几帳がある。文様は桜の花びらを群れとし、バックは白と薄墨色で暈している。この文様もここでは几帳に描かれているが、鎌倉時代以後は庶民の衣服にも登上する。

**B 信貴山縁起** (紙＝絵巻の中の位置を示す)

(一卷)

[1]小花文＝<sup>1</sup>紙 小花文は花の固有名詞ではなく、小さい花模様のこと、飛倉に驚く長者、菱烏帽子に白水干、袴は黄色地に薄墨で小花文が描かれる。<sup>2</sup>紙 [2]三ッ星、[3]四ッ星＝長者の家の者達が倉を追い走りだす下僕の中の一人、筒袖の白上衣に墨で三ッ星、四ッ星が描かれる。星の直径は3～4cm程か。 [4]寓生文＝網代の裏門を開く使用人の一人、茶無地袴をはき、上衣は筒袖衣に直径15cmもあろうか明快に寓生文が描かれる、寓生は大木に寄生する植物でデザイン化された形が好まれたと思われる。<sup>7</sup>紙 [5]一ッ巴、[6]二ッ巴、[7]三ッ巴、一人の筒袖の上衣に3通り

の巴が描かれる。地色の顔料退色前は、上衣は黄茶地に彩色されたその上に巴が墨の濃淡でリズムミックスに表現されていたと思われる。 [8]反菱文＝括り半袴、菱を主に考えれば反菱連続文、逆は格子文又は襷文になる。 <sup>14紙</sup>[9]小星文（連続）＝背をみせる下女、髪は元結、白小袖の上に腰布を巻く、腰布は身分の低い女が儀礼及び装飾として用いる布、この場合の小星は画面構成上も重要な役目を持ちその効果をだしている。 [10]縹縹文＝台所で洗物をする下女、筒袖白小袖に腰布をつけている。縹縹による手法ではないかと思われる。（二巻）蔵人、使者、清涼殿の右大臣以下公卿の装束は省く。 <sup>5紙</sup>[11]小花文＝侍賢門の外側の屋根下、主人の退出を待つ男。袴、水干共黄地に小花文が墨で一面に描かれる。 [12]葉文＝葉文も特定の植物を指すのではなく単に葉の形をした模様、11の小花文の男と話しをしている、白水干、袴は黄地に葉文のかたまり又は単独で一面に描かれる。 [13]小花文＝白張の肩、袖の空きから見える筒袖衣に小花文が染められている。 <sup>6紙</sup>[14]海松文＝隨身を馬に乗せようと後から支える男、菱烏帽子に黄茶色に海松文を全体に描く、袴は括り半袴で黄茶一色、吉祥文。 <sup>20紙</sup>[15]寓生文＝帝の御脳平癒によりお礼に信貴山へ向かう一行の最後の供の男、菱烏帽子、水干には寓生文を一面に描く、袴は橙色。 [16]小星文（連続）＝傘を持つ男、白張の下に黄地に墨で小星が一面に描かれる。 [17]小花文＝雑色の下に着る筒袖衣に小花文が描かれる。

（三巻）

<sup>4紙</sup>[18]寓生文＝尼君の供の者、蓑笠のいでたち、大きな荷物を背負う、上衣は寓生文が一面に描かれる。袴は親子縞、脚絆、草鞋履。 [19]花文＝尼君の一夜の宿、持仏堂へ食事を運ぶ小女、垂髪元結。茶色の花文にうす茶の小袖、無地の腰布をつける。花文は小花文より大きい普通の花の大きさ。 <sup>7紙</sup>[20]楓文＝灯を持つ男、白筒袖衣、袴に大き目で明快な楓文が描かれる。 <sup>11紙</sup>[21]海松文＝畠で菜を摘む女、黄地に黄茶の海松文が全体に描かれ白腰布を着用している。

### C. 粉河寺縁起

<sup>3紙</sup>[1]花文＝孔子古一家の食事中、孔子古は茶色筒袖衣に焦茶で三弁、四弁、五弁の花文が散らされ染められる。袴は白の括り半袴。 <sup>8紙</sup>[2]花葉文＝孔子古と柴の庵を建てた村人、うす茶筒袖衣に赤茶で花と葉が散らし模様で描かれる。 <sup>10紙</sup>[3]海松文＝庵に現れた観音像をみて孔子古歓喜する、孔子古は茶の筒袖に焦茶の海松文が全体に散らされる、袴は白の括り半袴。 <sup>14紙</sup>[4]円文＝馬に乗る老人の後で桧桶をかつぐ男、筒袖上衣は円を白貫きにし、薄藍で染められている。 <sup>15紙</sup>[5]寓生文＝黄色の直垂上下に寓生文が焦茶で描かれている。 [6]円文＝うす藍色地の上に濃色で円の輪郭だけが描かれる、円文はうす黄。 [7]点線文＝赤茶地水干に横長太目の点文が描かれている。 [8]格子に楓文＝菱烏帽子、うす藍地水干、袴は赤茶、細い二本線格子に楓文。 [9]斑濃文＝水干を大胆に白と藍の斑量しとしている、白い袴。 <sup>18紙</sup>[10]梶ノ葉文＝手細上衣、袴とも黄地に梶の葉を散らし、運筆式に黒で描かれる。 [11]二重格子に花文＝立木に飾りたてた馬が繋がるその前、口取りの男には上下共の黄地直垂に、赤茶色細線二重格子の同色花文が繰返しおかれている。 [12]瓜生文（西瓜）＝童行者と橋の上で話す老人、菱烏帽子、水干、半括袴、袴に西瓜が2個、蔓、葉と共に描かれる、布の上に描く墨絵の面白さがある。 <sup>19紙</sup>[13]円文＝馬屋の前の男、うす藍の水干に濃色で大きな円の輪郭を描く、円を目貫きとしている、白袴。 [14]矢羽文＝長唐櫃を運ぶ男、白手細、赤茶括半袴に黒矢羽根がたて縞のように描かれる。 [15]葉文＝長唐櫃を運ぶもう1人の男は菱烏帽子、白手細に括半袴着用、円形に近い大きな木の葉が連続文として描かれる。 [16]花葉文＝雉子をもつ男、上下共の直垂、茶の地色に黒色で花葉文が描かれる。 <sup>20紙</sup>[17]点線文＝貢進の目録をみる長者、袴にはたてに点線文を描く、 [18]小星文（連続）＝童行者と話す長者。狩衣、肩あきから連続小星の小袖がみえる。 <sup>21紙</sup>[19]小星文（連続）＝渡り廊下を急ぐ黒袴をもつ女、着用小袖には墨色で連続小星が描かれる。 <sup>23紙</sup>[20]点線文＝上半身

肌脱ぎの老婆の小袖には、たてに細かく規則正しい点線が描かれる、刺子の表現ではないだろうか。 ②葉文＝縁側にひじをかけ喜びを表わす下男、筒袖衣、袴は赤茶地に黒で大胆明快に円に近い葉文が描かれる。 ②小花文＝病全快の長者の娘、童行者に堤鞆と紅の袴を贈る場面、娘は小桂姿、山吹襲に豪華な花文が織りだされている。 ③花文＝倉から宝物を運んでいる男、白筒袖に半括袴、茶色地に焦茶で大きく花文を描く。 ④格子に楓文＝桧桶をもつ男の袴、赤茶細二本線格子に楓文、前述のように織物。 ⑤楓文＝倉で作業する後向きの男、黄地手細に楓の葉を全体に描く、うす藍の半括袴。 ⑥円文＝宝の箱を運ぶ男、赤茶地に焦茶の円模様を連続文として明快に描く、白半袴。 ⑦葉文＝倉からの品物の持出しを記録する男、うす藍の水干の裾に葉文を配し、黄の袴に点文をおく。 ⑧寓生文＝馬上市女笠の供の男、赤茶地に寓生文を一面に描く。 ⑨円文＝黒駒の鞆をしめる男、うす青地の上衣、茶地袴に黒円文を明快に描く。

⑩枝葉文＝鎧を直す男、辛子色狩衣上下全体に、枝葉文を散らし模様としている。 ⑪格子に花文＝轡をとる男、細二重格子に赤茶花文様の筒袖衣、茶袴をはく。 ⑫寓生文＝女房輿を担ぐ男、うす青地筒袖上下に寓生を一面に散らす。 ⑬楓文＝同じく輿を担ぐ男、うす藍地上下に楓文を描く、括半袴に藍の脚絆。 ⑭円文＝輿の横にいる男の上衣、うす茶地の上に茶地円文。

⑮井桁文＝赤茶色地の袴に井桁文を黒で描く。 ⑯寓生文＝警護の武士の1人、下半身は見えないが直垂に寓生文が描かれる。 ⑰円文＝弓袋をもつ男の直垂は茶色地に大きく黒円文の連続模様を染める。 ⑱葉文＝唐櫃を担ぐ後の男の上衣は、藍地に濃い藍で円又は半円状の木の葉文を染める。 ⑲楓文＝うす茶色の半括袴に焦茶で楓文を染める、藍の脚絆、草鞋を履く。

⑳葉文＝唐櫃を担ぐ前の男、3枚単位の葉を茶地上衣に染める。 ㉑楓文＝唐櫃と高杯を担ぐ男、筒袖上衣、黄色地に黒の楓を描く、白脚絆。 ㉒葉文＝傘持ちの男、白地の上にグレーの暈し、更に線で葉文を描く、白脚絆。 ㉓円文＝粉河への道を尋ねる男、藍無地の上衣、栗色地の袴に黒で明快に円文を染める。 ㉔輪貫文＝馬上の武者の正装、朱に金糸による刺繍の衣の上に白地に藍の輪貫文の狩衣。 ㉕瓜生文（西瓜）＝風折烏帽子、白地に墨で瓜を7個描く、蔓、葉も含む写実文様。 ㉖葉文＝下半身は土波に隠れて見えないが、上半身赤茶の筒袖上衣に円形、半円形の木の葉文を黒で描く。 ㉗輪貫文＝馬を引く男、上下直垂をうす藍地とし全体に藍色輪貫文を描く。 ㉘円文＝草堂を指す男、赤茶地直垂に大きな黒円文を全体に配す。 ㉙彩文＝杓を腰にしている男、他にみない派手な色合い、抽象文か州浜文のような具象性のあるものか、青と朱色を基調としている。 ㉚葉文＝うす藍の手細と袴はうす黄に葉文をおく。

#### D 伴大納言絵詞

本絵巻中、上巻に現われる公家、殿上人や検非違使は省く、唯し歩卒の直垂、袴等の文様は庶民として加えた。中巻、清涼殿内及び左大臣家の女房の桂、小桂も省く。下巻、廷尉、大納言邸内、検非違使及隨身も庶民の衣服からは除いた。

（上巻）

①花葉文。 ②輪貫文。 ③海松文。 ④葉文。 ⑤竹文。 ⑥葉文。 ⑦菱襷文＝朱色の扇をもつ水干男の括半袴に小さい菱文を繋ぎ襷状としている。 ⑧柏文＝水干男、うす茶の上衣に15cm程の柏文が黒で全体に散らし染められている。 ⑨七ッ星文＝紙の傷みでわかりにくい、水干か直垂、うす青の上に藍色で七ッ星文を描く。星の直径が5cmぐらいか。 ⑩楓文。 ⑪菖蒲文。 ⑫目結染。 ⑬花文。 ⑭花葉文。 ⑮海松文。 ⑯花文。 ⑰寓生文。 ⑱花葉文。 ⑲三ッ巴文。 ⑳渦文＝三ッ巴文と同じ衣服に描かれている。 ㉑滋目結文＝大まかな形（花等の具象か或は抽象文様か）を残し、他は細かい目結でうめられ藍色で染められている。 ㉒格子に角文。 ㉓松皮菱文。 ㉔円文。 ㉕寓生文。 ㉖三ッ輪貫文。 ㉗楓文。 ㉘小星文。 ㉙輪貫文。 ㉚楓文。 ㉛海松文。 ㉜小花文。（中巻） ㉝七ッ

星文。 ⑤矢羽文。 ⑥寓生文。 ⑦輪貫文。 ⑧枝葉文。 ⑨松皮菱文。 ⑩格子に花文。  
 ⑪花文。 <sup>13紙</sup>⑫小星文。 ⑬松皮菱文。 ⑭梶ノ葉文。 <sup>14紙</sup>⑮葉文。 ⑯四ッ目結文。 ⑰  
 四ッ松皮菱文。 ⑱葉文。 ⑲楓文。 ⑳寓生文。㉑四ッ目結文。 ㉒井桁文。 ㉓目結文。  
 (下巻) ㉔葉文。 ㉕剣巴文。 ㉖小星文 ㉗松皮菱文。 ㉘楓文。㉙寓生文。 ㉚目結文。  
 ㉛葉文。 ㉜円文。 ㉝楓文。 <sup>2紙</sup>㉞松皮菱文。 ㉟小星文。 ㊱葉文。 <sup>7紙</sup>㊲宝輪文。  
 ㊳梶ノ葉文。 ㊴楓文。 ㊵流水文。 ㊶寓生文。 ㊷円文。

以上平安時代の四絵巻に現われる149種の文様について述べてきたが、これを一覧表にまとめると次のようになる。

種 別	No.	文 様	病 草 子	信 貴 山 縁 起	粉 河 寺 縁 起	伴大納言絵詞	計
植 物 文	1	棕 櫚 文	1				1
	2	楓 文	1	1	4	8	14
	3	梶ノ葉文	1		1	2	4
	4	桜 花 文	1				1
	5	小 花 文		4	1	1	6
	6	寓 生 文		3	4	6	13
	7	葉 文		1	8	7	16
	8	海 松 文		2	1	3	6
	9	花 文		1	2	3	6
	10	花 葉 文			1	3	4
	11	二重格子に楓文			2		2
	12	二重格子に花文			2	1	3
	13	瓜 生 文			2		2
	14	枝 葉 文			1	1	2
	15	竹 文				1	1
	16	柏 文				1	1
	17	菖 蒲 文				1	1
	18	松 皮 菱 文				6	6
		計	4	12	29	44	89
抽 象 文	1	小 星 文	1	2	2	4	9
	2	幸 菱 文	1		1		2
	3	三ッ星文		1			1
	4	四ッ星文		1			1
	5	一ッ巴文		1			1
	6	二ッ巴文		1			1
	7	三ッ巴文		1		1	2
	8	反 菱 文		1			1
	9	円 文			9	3	12
	10	点 線 文			3		3
	11	井 桁 文			1	1	2
	12	輪 貫 文			2	4	6
	13	彩 文			1		1
	14	菱 襷 文				1	1
	15	七ッ星文				2	2
	16	渦 文				1	1
	17	二重格子に角文				1	1
	18	剣 巴 文				1	1
	19	宝 輪 文				1	1
		計	2	8	19	20	49

現象文		流 水 文				1	1
器具文		矢 羽 文			1	1	2
額 文	1	斑 濃 目 結 文	1			2	3
	2	纈 纈 文		1			1
	3	斑 濃 文			1		1
	4	滋 目 結 文				1	1
	5	四 ッ 目 結 文				2	2
	6	裾 濃 目 結 文				1	1
		計	1	1	1	6	9

## 4. ま と め

前掲の一覧表により四絵巻に現われる庶民の文様の種類、数及びその内容、又絵巻を資料文献としたことによる問題点についてもものべまとめとしたい。

### 1、絵巻物を資料とする場合の問題点

絵巻物を資料とし、その時代の事柄について考察する時、一つの大きな問題につきあたる。

絵巻物は先ず物語が書かれて数世紀を経て絵画化されるものが多い、又絵画化に着手してから完成迄長年月を費やす場合もある。

このようなとき画家はどの時代を基準として風俗や文様を描き入れるのだろうか、又画家であれば当然と思われる芸術性の追求、物語性の過大表現、或は画家自身の嗜好から事実を曲げて表現する場合もあると思われる、しかしこのことを考え過ぎると考察は一步も進まない、絵巻物を資料とし他に参考品がない以上、これを全面的に受け入れる態度も必要かと思われる。

### 2、文 様 の 数

各絵巻において庶民の衣服に現われる文様は「病草子」では4点と少い、これは物語の性質上登場人物の衣服も白や灰色に制限していることによるが、「信貴山縁起」には20点、「粉河寺縁起」では50点、「伴大納言絵詞」は72点と始めに考えた数より非常に多い、これは当時の庶民が生活の中で文様との深い関係を示しているものと考ええる。

又「信貴山縁起」より「粉河寺縁起」更に「伴大納言絵詞」と文様の数が多くなるのは3つの物語の土地柄によるものと思われる、其中最も辺境の地が信貴山、次に粉河寺で伴大納言絵詞は都の中心の御所を舞台としていることによると思われる、従って数の上においても庶民の衣服の文様の使用率はかなり高く「平安時代一般庶民の衣服は大部分無地物」の定説は覆えされるものと思われる。

### 3、文 様 の 種 類

病草子においては小星、幸菱以外は植物文、信貴山、粉河寺、伴大と進むにつれ植物文の種類を増し、抽象文も加わり形態も複雑美化されている、それに数は少ないが現象文・器具文が加わる、更に纈文が加わって内容も豊富になっている、従って色彩においては地味から派手、衣服の種類や文様においては単純素朴から複雑多種へと変化し、地域によるちがいをよく表わしている。

### 4、多く現れる文様5種

① 葉文＝「粉河寺縁起」と「伴大納言絵詞」に多く現われる、木の葉や草花は庶民が日頃生活

の中で親しみ好んだ材料で当然だと思われる。この時代の葉文は楓文のように正確に描写したもの、梶ノ葉文や柏文のように運筆的に巧みに描いたものも見られるが、大部分は葉の名称種類等とは関係ない、いわゆるハッパの散し模様である。

② 楓文＝「万葉集」や「枕草子」などにも繰返し登上する、奈良時代から平安時代にかけて貴族の生活に多くとりいれられている。庶民の衣服に多く用いられたのもその影響であろう。日本人の感覚として当然と思える、又楓文は数多く描かれる文様のうち最も正確に又写実的に表現され、いずれも実物の2～3倍と大きく描かれている。

③ 寓生文＝寓生文の特色は中心から放射状に細分化する線のリズムや、円形としてのまとまり、或は染色技法等も含め好まれたと思われる。

④ 円文＝円文は万葉や古事記にも現われる、又円文は歴史的にも宗教的にも意義をもつ文様である。しかし庶民はこれらのことは係わりなく、簡単な技法により染色しやすいことや、どんな衣服にも調和する等の単純なことから好まれたと思われる。

⑤ 小星文＝直系1～2cmぐらいの小さい円文、ほとんどが連続文様として描かれる。現代でいえば小さい水玉模様。絵巻物の絵画的構成上重要な役目をもつ場合が多いようで、庶民のしゃれた模様という意匠的效果と円文同様、染色技法が容易ということもあり多く用いられたと思われる。

## 5. 文様と染色技法

古代における染色技法は一般的に彩絵、摺絵及び三纈といわれているがこれについての詳しい論考はない。従って絵巻物に描かれた衣服の文様から推察する技法について述べる。

①描染 正倉院御物に「彩絵半臂」「麻布菩薩」更に薬師寺宝物「吉祥天像」等をみると細密に或は大胆な運筆により墨や顔彩を画材とした優れた作品を多く見ることができる。又描染めは材料や手法も簡単、広い作業所も不要で、自給自足的生活が残る時代には適した技法であったと思われる。

②地染 絵巻物にみる文様の多くは、うす黄、うす茶等に地染めされた後、文様が染められている。先染めでも後染めでも、或は染材の関係からも、うす黄やうす茶に染めることは最も容易だったと思われる。又絵巻物にはうす藍地に濃い藍で文様が描かれたものも多い、又濃い藍で地染めした水干や直垂もみられる。このことはこの時代庶民の間に藍染がかなり普及していたことを示している。

③纈纈 四絵巻の中には、数は少ないが絞り染めの技法が見られる。それは二ッ目結、三ッ目結等簡単なものから滋目結のように総鹿ノ子を連想するもの、斑濃目結染のように辻ヶ花を想わせるものまで技法の範囲は広い、絞りは庶民の染色として奈良朝以前から行われていたとはいえ驚くべき技術である。

④纈纈 正倉院の染色作品中に「黄地堯文纈纈絶」がある。これに信貴山<sup>四〇</sup>「纈纈文」の下女の腰布がよくにている。纈纈という簡単に誰もができ、又染めの美しさを発揮する手法がこの時代庶民の間に広く活用されていた可能性は高いように思う。

⑤摺染 絵巻物に前述のように多くの文様が描かれているのをみても、ある程度の量産型染色法が存在したということは充分考えられる。平安時代京都で型を用いた鑑の踏込型という技法がある、同じ京都で染めを行う人が何百という小星を一つ一つ筆で描いていたとはどうしても考えられない、大きな円文等も或程度紙型のようなものを使えば早くきれいに仕上がる、いわゆる摺染（摺込み染め）のようなものが存在していたことは十分に考えられる。

以上四絵巻により庶民の文様やその技法を考察してきたが、庶民の生活は考えていた程単純な

ものではなく、生活の中に多くの文様や技法をとりいれ、これを楽しんでいた、それは貴族からの影響もあり庶民自身が工夫し作りあげたものもあったと思われる。

### 参 考 文 献

- |       |                       |       |      |
|-------|-----------------------|-------|------|
| 小松茂美編 | 「餓鬼草紙、地獄草紙、病草紙、九相詩絵巻」 | 中央公論社 | 1987 |
| 〃     | 「信貴山縁起」               | 〃     | 〃    |
| 〃     | 「粉河寺縁起」               | 〃     | 〃    |
| 〃     | 「伴大納言絵詞」              | 〃     | 〃    |



## 各絵巻と文様



1



2



3



4



5



6

1. 病 草 子 連続小星文
2.     "     辛菱文
3.     "     棕栢文 (暖簾)
4.     "     斑濃目結
5.     "     桜花文 (几帳)
6. 信貴山縁起 三ッ星文  
                  四ッ星文  
                  寓生文



1



3



2



4



5



6



7



8



9

1. 信貴山縁起 縹縹文
2. " ニッ巴文、三ッ巴文  
渦文、反菱文
3. " 小星文
4. " 反菱文
5. " 葉文、小花文
6. " 海松文
7. " "
8. " 楓文
9. " 花文



1



2



3

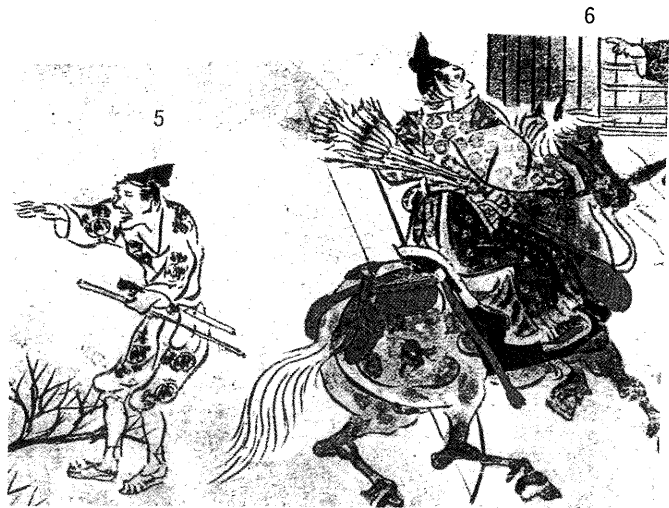


4



7

1. 粉河寺縁起 二重格子に花文、枝葉文
2. // 点線文
3. // 花文
4. // 矢羽文
5. // 瓜文
6. // 輪貫文
7. // 寓生文、円文  
格子に楓文、点文、斑濃文



5

6



1



3



2

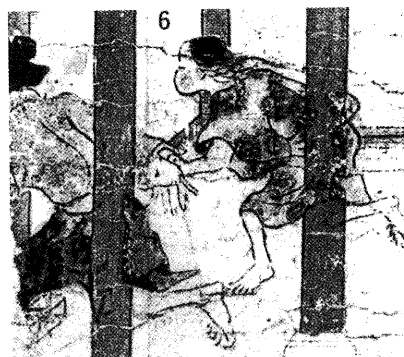


4



5

1. 伴大納言絵詞 竹文
2.       〃       三ッ巴文、格子に角文  
              松皮菱文、滋目結文
3.       〃       柏文 菱襷文
4.       〃       七ッ星文
5.       〃       井桁文
6.       〃       目結文、円文



6